

放送部活動における被爆体験の継承への取組について

広島県立五日市高等学校

1 取組の概要

本校放送部の活動の中で柱の一つとしていることが、ヒロシマを知り、伝えていく被爆体験の継承についての取組である。「被爆した広島を言う言葉がある。被爆した広島が言わせる言葉がある。」とは、広島県出身の作家・竹西寛子さんの言葉である。本校では、ラジオやテレビのドキュメンタリー制作やアナウンス、朗読を通して、この言葉について考え、未来に残していく活動を行っている。

広島に落とされた原爆がもたらしたものが何だったのか、被爆者の方が残している言葉の意味や重さを実感的に捉えられるように、生徒自らが聴き取り取材やフィールドワークなどを行っている。まずは新聞記事や地域イベントなど様々な方法で被爆証言を集めたり、被爆遺構について調べたりする。そして、それらの中から伝えるべきテーマを選び、深く取材を行う。取材計画を立て、取材対象者の証言を記録し、書き出し、検証を行う。その繰り返しによりテーマについての理解を深め、調べた内容や集めた証言をもとに、アナウンス原稿の作成やドキュメンタリー番組の制作を行う。

そのような活動の過程によって完成させたアナウンスや朗読、番組は、放送部活動の成果を発表する放送コンテストで上演したり、学校で行われる平和学習の場で発表をしたりしている。

2 本実践事例について

(1) 本事例実施の背景・これまでの取組

平成24年の秋から、広島電鉄家政女学校の生徒であった方に取材し、その原爆体験をテーマにしたラジオドキュメント番組の制作を始めた。きっかけは、本校生徒が通学で利用する広島電鉄の駅舎が取り壊されるという情報を得た部員たちが駅舎の歴史について調べる中で、原爆投下三日後に走った「一番電車」の存在を知ったことである。そして、電車を走らせるための変電所が廿日市にあったこと、しかもその電車を運転したのは自分たちと同じ年頃の女学生であったことを初めて知ったのである。被爆した後も運転手として業務した方、寮で被爆し背中にガラスの破片が突き刺さった方、亡くなった仲間を看病できなかったことを後悔し続ける方、そしてその家族として被爆体験を継承しようと模索している方たちと部員は出会い、数多くの実体験や考えを聞きながら、4本のラジオドキュメンタリーの制作を行った。

(2) 指導のポイント

教科書に書かれていることやテレビで語られることを、生徒が「今の自分」に重ね合わせて考えられるように指導することが第一のポイントである。

原爆をテーマにした作品を制作する作業の本質は、亡くなった方たち一人ひとりの人生と向き合うということをしかりと認識させることにある。先ず何よりもこのテーマを真摯に伝えようとする姿勢や心構えをもたせることが大切である。例えば、本校の場合、原爆をテーマにした原稿や作品に取り組んだり、朗読ボランティアなどへ参加したりするために、被爆遺構を巡り、体験者やそれを継承していこうとする方々からお話を伺う。そしてヒロシマの記憶を語る人との出会いを通して、当時の広島に生きていた人たちに思いを馳せ、今という時代をまた未来をどう生きていくのかを考えさせた。(付きたい力2)

第二に、得られた証言を番組として聴き手にわかりやすく伝えるために、①「〇〇の話題を通して××を〔見る・考える〕番組にする、②一つの番組に情報を詰め込みすぎない、③多角的に取材した情報を一つの視点から伝えるなどの工夫をさせることも必要である。

3 本事例の指導計画

次に示すのは、平成27年7月に作成したラジオドキュメント「君に伝えたいこと」についての指導計画ならびに実践である。

(1) ねらい

「しっかり伝えてくださいね。あとお願いします。」という言葉を残し亡くなった被爆者の方たちの言葉の意味を考えさせ、被爆70年を迎える今、自分たちができる継承について考えさせる。

(2) 活動の過程

	主な活動	指導上の留意事項
第一次 (平成26年 2～7月)	<ul style="list-style-type: none"> ○元広島電鉄家政女学校の方を取材し、「追憶ヲ明日へ」というラジオドキュメンタリーを制作する。 ・当時の女学生も、家族や友人との毎日や恋愛、今の自分たち高校生と変わらない毎日であったことを知る。 ・女学生たちの体験談を語り継ぐ活動について考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・被爆者の方たちの証言を聴くことは、その方たちが生きてきた人生に向き合うことであることを、事前や事後の指導の中で行った。 ・自分たちの日常と当時を重ね合わせるように指導し、原爆が奪ったものの尊さを考えさせる。
第二次 (平成26年 8～12月)	<ul style="list-style-type: none"> ○取材した方が亡くなれば、被爆者の方が何を伝えてくれていたのか、どう伝えて行けば良いのかについて、模索をする。 ・広島市内を歩き被爆遺構を巡る。 ・被爆者や継承に向き合う人たちを取材し番組制作やアナウンス、朗読に取り組む。 	<ul style="list-style-type: none"> ・8月6日に広島市内を歩き、当時の体験者の方たちの足跡を辿り、今も残る被爆遺構やそれを守る人たちと出会い考えさせる。
第三次 (平成27年 1～4月)	<ul style="list-style-type: none"> ○被爆者や継承活動を行う方取材し、8月6日に何があり、被爆者の方が何を伝えようとしていたかを考える。 ・関係者の方、被爆2世、3世として継承活動をされている方を取材する。 ・高校生の継承への意識を取材する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで学んだことをもとに、亡くなった被爆者の方の証言を見直させる。 ・高校生の意識について調べ、今の自分たちができることに気付かせる。
第四次 (平成27年 5月～7月)	<ul style="list-style-type: none"> ○伝えたいことを考えて番組の構成、編集、発表を行う。 ・これまでの取材活動で得たことを整理し、取材した音声やナレーション、音楽を使用して表現する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・フィールドワークや取材活動を通して育まれた「自分たちの世代が記憶を過去から現在に繋げなくてはならない」という部員の意志が伝わるように、構成の助言を行う。

4 生徒の反応（活動後の感想等）

原爆が落とされた悲しい過去があり、今という平和な時間がある。当たり前過ぎて過ごしている家族や友達との時間が、どれだけ大切なものなのかに気付いてほしい。それが取材させていただいた被爆者の方が、私たちに伝えたかったことではないかと思う。ラジオドキュメント「君に伝えたいこと」は、その方が遺して下さった言葉を私たちに考え、答えを見つける過程を番組にしたものである。作品を聴いて、今何が自分にできるのかを考えてもらえたら嬉しい。



5 指導を通して

放送部活動は、自分と向き合い、他者を認め、可能性の翼を広げる場である。

- ① 放送活動を社会と関連付ける（リアリティをもたせる）
- ② 放送部活動で学んだことを、自分自身と重ね合わせる（当事者意識をもたせる）
- ③ 放送部活動で学んだことを、次に学んでいくことと広く関連付ける（協働的に考えさせる）
- ④ 放送部活動で学んだことを、社会の中でどう生かしていくかを考える（有用性をもたせる）

放送部活動を通して、以上の4つの見方・考え方を育むことができたと思う。